

大脇康弘・田村昌平編『学校を変える 授業を創る』学事出版、2002 年

国立教育政策研究所 木 岡 一 明

1. 変化への挑戦

本書は、まさに書名の副題にもあるように「今宮総合学科の挑戦」の記録である。大阪出身のわたしには、この創立 100 周年を迎えた今宮高等学校がどんな学校だったのか、府内の公立高等学校においてどんな地位と伝統を築いていたのかは、おおよそ承知している。大阪は、御三家と呼ばれる伝統校を中心に長く公立高校優位の進学実績を誇ってきた。

しかし、少子化とともに公立離れがしだいに進み、伝統校といえども、安閑としていられなくなってきた。その一方で、旧制中学・旧制高女からの卒業生による同窓会組織や教職員の中には卒業生が少なくないこと、などが背景要因となって伝統や校風を重んじる傾向が強くなり、そうした学校では一般に状況の変化に即応していくのが難しい、という問題を抱えている。本書のメイン・ストーリーは、その一つ、旧今宮中学（市内で 4 番目、府内で 10 番目の創設。卒業生には福井謙一氏や今江祥智氏がいる。）以来の普通教育の伝統を引き継ぐ今高が、未知なる世界（総合学科）に向かい、様々な支援を受け自助努力を重ねて移行・再編を進めてきたこと振り返りながら、さらにこれからの取り組みによって生成される未来に向けて発信した「挑戦」状でもある。

ただ、わたしには、この「挑戦」にもっと複合的な意味が込められているように思える。その意味の一つひとつが、メイン・ストーリーに絡んで厚みを加え、心地よいハーモニーを醸し出している。そこで、以下では、本書の構成と特長を概観した上で、限られた紙数であるが可能な限り複合的な意味を解きほぐしながら、あらためて本書をわたしなりに意味づけることで書評としたい。

2. 本書の構成と執筆者

プロローグ 学校教育改革を担う	大脇康弘 (スーパーバイザー的存在)	[6-12]
第 1 章 総合学科の理論と実践：全国的動向	大脇康弘	
1 総合学科の学校像と具体化：フレキシブル・ハイスクール		[14-18]
2 総合学科の現状評価：肯定的な評価と問題点		[19-22]
3 総合学科の構成原理：総合化と選択化		[23-27]
4 総合学科の学校評価：絶えざる評価と学校教育改革		[28-33]
第 2 章 今宮総合学科の軌跡		
1 今宮総合学科の創設：「今宮は愉快だった」	河田 修 (前校長)	[36-44]
2 「輝け個性 磨け知性」の総合学科づくり	田村昌平 (現校長)	[45-50]
コラム 1 「高校改革のバイオニア」総合学科	津田 仁 (府教委指導主事)	[52-53]
第 3 章 高校教育の総合化と選択化		
1 入学者の変容と入試制度	木下伝二 (前教務部長；数学科教諭)	[56-60]

2 教育課程の編成と生徒の科目選択	木下伝二	[61-71]
3 生徒の進路形成と進路ガイダンス	三浦清司 (初代総務部長；元将来構想研究グループの座長；地歴科教諭) 黒田美千代 (進路指導部長；生物科教諭)	[72-81]
4 生徒の自己規律と自己実現	檜山泰範(保体科教諭) ／川畑勲(同)／前田富夫(同)	[82-89]
コラム2 みんな自分の夢に向かって進もう	金圭俊(4期生)	[90-91]
第4章 教育改革を推進する学校経営		
1 ミドルアップダウンの学校経営	田村昌平	[94-99]
2 PTA活動の破壊的創造	小笹貴祥 (元PTA会長；現後援会長)	[100-102]
第5章 授業改革への挑戦		
1 手応えある授業を求めて：ビジョン21の取り組み	◎早崎公男(元自治会指導部長；ビジョン21授業を考える会の座長；書道科教諭)	[104-111]
●知的好奇心を学びに		
2 「話せる英語」も「受験対策」も「映画で英語」におまかせー実用英語B	田口順一(英語科教諭)	[112-117]
3 かけがえのない地球に学ぶー自然史探究	松本静雄(地学科教諭)	[118-124]
4 古代人の生活を掘るー夏期集中講座「考古学入門」	西谷義昭(地歴科教諭)	[125-129]
●創造的に生きる		
5 「書」が現代の高校生にフィットしたー書道	早崎公男	[130-136]
6 総合芸術の軌跡と指導の喜びー美術	笹田康弘(美術科教諭)	[137-140]
7 豊かな感受性の育成と音楽体験をー音楽	坂原進(音楽科教諭)	[141-146]
●学びの目標と方法を見つめて		
8 日常生活と授業を「地つづき」に：「一六歳からの発信」を開くー国語I	◎小山秀樹(国語科教諭)	[147-154]
9 学力形成に向けた数学科の取り組みー数学	浅尾啓史(数学科教諭)	[155-159]
10 大阪のベンチャー精神を探るー夏期集中講座「大阪の産業」	三浦清司	[160-163]
11 (補論)体験し自立する生徒たちー多彩な学校行事	◎杉野正(国語科教諭)／棚橋孝彦(前教務部長；数学科教諭)／三浦清司／出口秀明(英語科教諭)／岸田良(公民科教諭)／蔵谷和弘(化学科教諭)／榎木邦夫(数学科教諭)／早苗良雄(前教頭)／木下稔(総務部長；普通科最後の50期学年主任；英語科教諭)	[164-172]
第6章 今宮総合学科を語る		
1 ■教師・父母等座談会■ 生徒も親も先生も輝いている学校を創りたい	14名	[174-182]
2 ■教師座談会■ 今宮総合学科の軌跡を振り返る	11名	[183-191]
3 ■卒業生座談会■ 私たちの学校生活と進路選択	16名	[192-202]
資料 1 総合学科卒業生アンケート結果(1～4期生)		[203-206]
2 保護者アンケート結果(3～4期)		[206-207]
3 授業診断カード		[208-209]
エピローグ 教育を実践すること、記録すること	大脇康弘	[210-213]

(執筆者の◎印は編集協力者 敬称略。[]内の数字は掲載頁。)

3. 本書の特長

本書は、今宮高等学校の総合学科に関わった人々による共同執筆である。本書が刊行される経緯については「エピローグ」に詳しい。それによると、大協会員と田村校長との出会いが契機となったようである。そこからしだいに大協会員が研修会や報告書『輝け個性 磨け知性－今宮総合学科1期生の歩み』編集などを通じて今宮高校の先生方との交流を深めながら、『月刊高校教育』での連載（2001年4月号～2002年3月号）へと展開し、それも「学校評価」問題に焦点化したものから、もっと多彩な内容と広がりをもった実践的研究活動記録へと展開し、本書に至った。

大協会員による「エピローグ」の日付が2002年3月31日、刊行日が同年5月31日。上述の連載が3月号まで続いていたのだから、慌ただしい編集スケジュールであったことが伺える。総勢29名、座談会参加者を含めると43名の人々による共同作品であるだけに、その執筆調整だけでも相当の労力を要したことは想像に難くない。日本教育制度学会の編集委員会でお会いして、この頃の大協会員の様子をかいま見たわたしには、そのたいへんさが目に浮かぶ。しかし、その内容は躍動感に溢れている。まさに、今宮高等学校のキャッチ・コピー「今宮は愉快だ」（杉野教諭が考案）を行間に踊らせ、学校づくりの楽しさを訴えている。

本書の最大の特長は、言うまでもなく高校教育改革のパイオニアとして脚光を集めている今宮高等学校総合学科の創設から6年間の活動を総括したものである点にみられる。その取り組みは、確かに「挑戦」である。しかも、その総括は、学校経営研究者が学校改革の現場に入って、そこにいる人々と一緒に改革に関わっていった成果そのものである。ともすれば、実践と理論の乖離が問題として取り上げられ、現実遊離の理論と批判される一方、成り行き管理、理論なき実践と批判される両者の関係が克服され調和が導き出されている。「挑戦」の別の意味がここにある。

第2の特長は、大協会員自身が「プロローグ」で「今宮総合学科は生成発展しつつある組織体」であり、「今宮総合学科の理念と枠組みは概ね確定してきたが、未だ完成されたものではなく今後とも作り変えられていくもの」と述べているように、組織過程のダイナミックスを書き残そうとしている点にある。そのようなダイナミックスは、組織一般の特長からみると当たり前のことでありながら、学校組織は不活性の傾向が強く変化は乏しい。それは、学校が「不易」を重んずるからでもあるが、あえて「絶えざる挑戦」とその手応えをもとに展開していった改革過程は興味深い。

そのような改革過程は、組織論では環境変化と環境適応の相互作用と説明されるが、第3の特長は、その相互作用を繰り広げるに当たって評価やアンケートを多用している点である。まさに本書が「学校評価の試み」と題した連載から始まったことに表れているように、執筆内容からいえば、各々の取り組みの総括において評価が貫かれているともいえる。こうした評価の位置づけは、形骸化や空洞化が危惧される今日の学校評価問題に、具体的な展望を示唆するものとなっている。これも「プロローグ」によれば、「学校のこれまでの取り組みを反省的に捉え直し、その成果と問題点を確かめ、さらに今後の課題や改革方向についての論点を整理しいくつかの見解を示し」たものであり、「学校の主体性と必要性」に基づく取り組みと説明されている。

第4の特長は、その評価や総括に当たって、上述の構成からもわかるように、生徒や保護者、卒業生の声が集められ、それらを集約している点である。最も端的には、卒業生のコラムがあったり、卒業生による座談会（そのテーブル起こしも参加者自身が行っている）が組まれていることや元PTA会長による執筆があることなどに示されている。

そして、第5の特長は、公刊するまでに全員でよく協議された内容が、それぞれの執筆者の持ち味を生かしつつ書き語られている点である。その背景には、「開放的で元気の良い生徒、フットワークの良い教師集団」（「プロローグ」）、「『帆船の船長』として田村校長がしっかりリード」されてきた「ざっくばらんで元気、柔軟な考えと実行力」をもった教職員による「核のあるたくましい教師集団」（エピローグ）という特性があった。もちろん、改革が始まった当時、すべての教職員がそうした特性を担っていたわけではなかろう。最近、この学校を訪れた青木朋江会員は、「大変だから、労働加重だから反対する教職員がいても、それを乗り越えて、子どもたちのためにいいことだから、がんばろうという教職員が存在する以上、そのような教職員の気持ちを絶対に生かします。」という話を聴いてきている（『学校経営』2003年2月号 71頁下段）。

4. 本書の読まれ方

（1）ある高等学校の試み

「学びたい人が、学びたいときに、学びたいスタイルで」。こんなキャッチフレーズを掲げている学校がある。この学校は、2002年度から、従来あった夜間部定時制課程に加えて昼間部定時制課程を設置し、それらを連結させて、一日当たり12時限授業をスタートさせた。そして、生徒それぞれのライフスタイルを尊重し、一日の授業時間帯を「午前」「午後」「夜間」に三分して、そのいずれかを各自の所属時間帯としつつ他の時間帯での履修も認め、総合選択制を導入して、どの科目でも自由に選択でき、まさに「学びたいときに、学びたいスタイルで」学べるシステムにしているのである。学校設定科目（チャレンジ科目）には、「漢字チャレンジ」「エコライフ」「将棋学」「数学ステップ」「英語ステップ」などが開設され、生徒の興味・関心を喚起する配慮や学力に応じる配慮も加えられている。このほか、テーマ別選択講座として、ヨガや折り紙、七宝焼きや和太鼓などの講習も開かれている。めざすは、やらされる勉強からの脱皮である。

今宮高等学校と同様に、この学校が創った「教育ビジョン」があり、そこでは「柔軟で弾力的な教育課程から、生徒が自分にふさわしい学びのスタイルで、主体的に学び、意識的に努力し、知識を一方的に学ぶ教育から、生徒が自ら学び、自ら考える教育に転換し、確かな学力を培っていける学校づくり」と説明されている。そして、その重要な柱として、多様な「学習活動から達成感や充実感を味わい、学ぶ楽しさを体得し」うる「生涯学習の基盤としての学校教育」の推進、学校と地域の人々の「それぞれが自らのためにということも意識しながら協働して学びの機会をつくっていくこと」、「地域における生涯学習の推進」、「異校種および同校種を含めた学校相互の機能的連携」、「家庭や地域に発信するオープンシステム」の積極的推進、が掲げられている。

さらに、「このような様々な取り組みを通して、教職員が『生き生きと活動する学校づくり』を展開し、『生徒に成就感、充実感を与える授業』を研究実践すること」が約されているのである。

わたしは、この1年足らずの間、この学校にアドバイザーとして関わってきた。実は、この学校には、強力な推進力となってきた3名の教員がいる。A教諭（商業科）は同校に10年以上在籍し、年齢も3名の中で最も若く（30代半ば）、今年から始まった指定研究を中心的に担い、管理職と教員とのパイプ役になっているなど、同校の改革上、重要な存在となっている。8年在籍する大阪出身のB教諭は、これまでの学校改革に教務の面でイニシアティブをとって推進役を担ってきたが、管理職試験に合格しているので、来年度には同校にいない可能性が高い。同じく大阪出身のC教諭（国語科）は、「足下をしっかりとみる」という考えをもち、生徒指導面で尽力してきた生徒と深く関わる率先垂範的な教師である。わたしは、この3名の教員を含め、この学校で中心的な役割を發揮している教員数名に対して、本書の感想文を求めてみた。

（2）本書はいかに読まれたか

A教諭は、教頭の話によれば「感想の提出を拒否」した。わたしには半ば予想された反応であった。

B教諭は、赴任してからこれまでのこの学校の改革の経緯を辿った上で、今宮高校が会場となった第6回全国高等学校総合学科教育研究大会に参加した当時の感慨を書き起こし、発表については「生徒はとにかく生き生きと、しかも全く物怖じせず自信に満ちて発表していた。」「聞く側も、発表へよく集中していた。」「発表を共有し、共に楽しんでいるといった様子であった。」との感想を、また本書でも紹介されている各授業については、そのユニークさが「正直うらやましかった」との感想を寄せている。また、展示されていた作品については「個性的で、不思議と惹きつけられた。」と述べ、「今宮高校は、とにかく生徒が澁刺としている。」「知的に元気なのである。」と指摘し、だから本書の内容を「事実である」と認めている。そして、今宮高校の取り組みについて、「その中心は『授業を創造する』ために・考えること・体験的・教科書にとらわれない・教科の枠を超えといったキーワードであり、とてもわかりやすい。」と評し、この学校でも「具体的に何をすべきか教職員全員でしっかり認識し、生徒とともによりよい学校を創造していきたい。」と結んでいる。

C教諭は、授業づくりに視点をあてて、生徒の在学年数に対応した目標を定めた上で、この学校が取り組もうとしている「ステップ授業」の構想を、国語の授業として、「おもしろみの付加」の観点から、「『わかる』おもしろみ」（意外性を楽しむ）と「リンク学習のおもしろみ」（俳句づくりと書道のリンク）の2点で示している。教材についても、「生徒の発達課題を鑑みて単元を連面体でつないでいく」ことの必要性を提起している。なお、こうした構想をまとめるに「参考となったキーセンテンス」として、「作品の良いところを見つけて誉めること。良くないところを指摘する必要はない。良いところが解れば、良くないところは自然に解る」（本書135頁）、「ランチタイムコンサート」（同140頁）、そして、C教諭らしく、「僕らが自らの意志を貫き通すことができたのは、僕の持つ『夢』の力であるといえます。」（同146頁）を挙げている。

さて、この3名に一目置き、自らも果たせる責任を負っていきたいと考えつつも、しかし、そこまで献身的にはなれないと思っている人々は、どう読んだのか。

まず「総合的な学習の時間」のプランニングを担っているD教諭（地歴科）は、この学校の問題が「お互いどこまで妥協して和を保っていくことができるのか」にあると捉え、「数多くのハードル」を「飛び越える発想ではなく、なぎ倒して進んでいく力強さ」を感じたと記している。また、今宮高校の成功には「正確な現状分析と構想に向かっていく努力と工夫が必要だった」ことを読み取っている。そして、今宮高校から「失敗を恐れずチャレンジしていく姿勢」「時間と苦勞を惜しまずぶつかっていく熱意」を学び、「力まず自然に夢を持ち続けたい」と結んでいる。

他方、「ステップ授業」の具体化を担当しているE教諭（地歴科）は、もちろん授業づくりに「盗むべきところ学ぶべきところ」を見いだしているが、むしろ本書にあまりはっきりと書かれていない「具体的にどのような教員集団であったのか、どのような姿勢や人間性を持った校長先生であったのか」「もっと泥臭い部分の教員同士の人間関係や教員と管理職の関係がどうだったのか」を知りたい、と記している。それは、この学校が「どんどん改革が進められてきている状況があるが、十分なコンセプトが得られていない状況ではない」と捉えているからである。

では、この学校で最年少のF教諭（保健体育科）は何を思ったのか。彼は、「一番感じたことは、全職員が一丸となって改革にむかっている点」で、それが「成功させた1番の要因」と捉え、「このことを感じた時、ふと自分が恥ずかしくなった。」と述べている。改革期にあるこの学校で、自分は、「まだ全然、力になっていない、というか力になろうとしていない」「どういうふうに変わっているのか、何を必要としているのかをはっきりわからずに一部の先生だけに任せている」。こういう自己反省をしながら、何ができるかを、この学校の条件に即して本書から読み込んでいる。とりわけ、今宮高校の授業について、「これでは生徒のやる気がでないわけがない」と評し、「このような授業を自分の受け持つ体育や保健の授業でもやらねばならない」と結んでいる。

以上のように、わたしの関わっている学校の教員たちは、本書を自分の勤める学校の現状に照らして肯定的に受け止め、自らの反省を引き出している。また、授業づくりのヒントを読み取っている。ただ、共通に問題と捉えているのは、自分の属する学校が、同僚性やまとまりを欠いており、一部の教員（要はA・B・Cの教諭たち）に、委ね（委ねさせられ）ていることである。

その問題を乗り越えていこうとすると、E教諭が述べているように、実は、本書には、その具体的な手だてが示されていない。学校が組織として動き始めて以降の「取り組みをできるだけ客観化し、相対化することに心がけた」（「プロローグ」）ゆえに、いかに動くようになるのかは、河田・田村校長によるリーダーシップや中核的に動いた人々の熱意・工夫が有効に働いたということが伺えるものの、そうしたものが機能していないところ、そのような位置にいない人にとっては、ただただ羨ましいと思い、やはり信頼できる管理職や組織的なまとまりがあればなあと思いつつ、せめて自己の関われる範囲では、授業づくりに精進を、と自分の授業を反省するに留まってしまう。

5. 「第1章 総合学科の理論と実践：全国的動向」の本書における位置をめぐって

上述したように、本書に結実してくる今宮高等学校に対する大協会員の関わり方やそこに投入された大協会員自身の「熱意や工夫」が大きいことは、本書を通読すれば随所に示されている。しかし、「教育活動と経営活動をトータルに記述」（「エビローク」）してあるがゆえに、学校経営の全体像や理論を探ろうとすると、まず大協会員による「プロローク」「エビローク」そして第1章である。そして、河田・田村両校長による第2章「今宮総合学科の軌跡」ならびに田村校長と元PTA会長の小笹氏による第4章「教育改革を推進する学校経営」であるが、それらは「客観的事実」中心の記述となっており、配慮や意図が読み取れず、また理論にまで純化されてもいない。E教諭の疑問も、A教諭の感想文提出拒否の理由も、そしてわたしの不満もここにある。逆にいえば、「総合学科の理論と実践」が、なぜ、第1章に書かれ、しかも、「全国的動向」でなければならなかったのか。

本書全体の見取り図の提供は、「プロローク」で果たされている。それに対して第1章では、総合学科の定義から始まり、その設置状況、高校改革推進会議による報告書に描かれた学校像、特徴、現状評価、日米比較と制度史的総括、そして学校評価へと展開し、今宮総合学科の国際的な位置づけ、日本の全国的な位置づけを明確にしていこうとをねらいとしている、ととらえられる。その概要は、確かに簡潔でわかりやすい。また、大協会員のこれまでの研究を反映して、総合学科の学校像を「柔構造型の学校」ととらえ、その新しい特徴を4点にまとめたり、実態を7点に整理するなどしているが、簡潔であるだけに、その判断基準や事実の裏づけなどが十分に示されておらず、理論というには物足りない。その中で、学校評価論は、当初の連載テーマでもあっただけに今宮総合学科の取り組みへの言及もなされ、随所に示唆的なポイントが書き込まれている。

そうした学校評価論でわたしが注目する点は、「学校評価基準は共通的・標準的な基準と個別的・特殊の基準とから構成されること」が望ましく、「前者は学校間比較が可能であるが、後者は学校の特性や課題に基づく独自性の高いもの」としている点（30頁）、そして、「本書の刊行」を、学校評価についての『実践的研究』の成果として生み出されたもの」と捉えている点（33頁）である。この2点は、これまでのわたしの発想にはなかった点であり、わたしにとっても今後の学校評価研究を進める中で掘り下げて考えてみたい問題である。

他方、概念的に混乱を引き起こしかねない危険性があると思われるのは、第一に、自己評価、内部評価、外部評価についてである。第二に、学校評価の役割を「基本的」「対内的」「対外的」に3分して捉えておられるものの、その内と外のそれぞれに含まれる主体をいかに区分けしうるか、についてである。この二つの点は、結局、共通する問題を含んでいる。学校にとって「自己」とは、組織体として学校を捉えたときに学校総体を指すと理解しうる。したがって、実体概念ではなく、その学校を組織構成員として担う個々人の「自己」を集約したものと観念される。その自己は、学校が閉じたシステムならば、内部と一体化させうる。しかし、今日の学校は、オープン・システムであることが強く求められており、内外の区分をなすことは、自己評価の発展を捉える上でも、また学校組織開発の展望を描く上でも、かえって阻害要因になる。たとえば、内にいる教職員であっ

ても、学校経営システムに乗ってこない人による評価は内部評価と断言するのか、逆に、学校支援ボランティアによる評価は外部評価なのか。そもそも大脇会員自身による今宮総合学科評価は、自己評価なのか、外部評価なのか。わたしには、こういう議論は無益のように思える。しかし、学校に「内と外」の視点を投入すると、その議論から逃げられなくなってしまう。わたしは、学校評価は、まさに大脇会員が、今宮高校の方々と学校づくりを進めて来られたように、同僚性（大脇会員の言葉だと「同行者」）を基本とした自己評価－他者評価の双方向的な関係のもとで展開していく、と考えていくことが、意味のある取り組みを引き出し学校創造・教育創造を豊かにしていくと思う。

このようにみえてくると、この今宮総合学科の取り組みの帰結（未だ生成し続けるものであるにしても）を、改めて学校経営理論の枠組みで整理し、その内実から、巷間、極めて皮相的に展開している学校づくり、あるいは学校評議員制、学校協議会や学校評価のあり方を批判的に総括して一般化を図るとともに、今宮高等学校に向けた種々の理論的観点からの提案を文字に（恐らく、この間の関わりにおいては言葉にされてきたのだろうが）してほしい。そのためには、「エビログ」の前に「今宮総合学科の実践を理論化する」という章が必要となろう。

言うは易いが、行うは難し。このような取り組みを通じて、学校経営の理論と実践の結合を進めてこられた大脇会員、今宮高校の関係者に敬意を抱く。わたし自身も、学校経営研究が学校経営の実践に対してあまり貢献してこなかったという思いを抱いている。そもそも「研究」であったのか、研究成果をいかに発信してきたのか、そして研究倫理をどう考えるか、自己反省する視点は多い。学校経営研究がもっと精確な実態認識の上に進められるべきであろう。アプローチの問題だけではない。学校経営実態のどこに不具合が発生しているのか、あるいは実践サイドにおいてはどんな問題を解決する理論が求められているのか、を知った上で、研究を組み立てていく指向もまた学校経営理論を形成する上で必要である。ただし、必ずしも研究者が見出す「不具合」と実践サイドが認める「問題」とは一致しない。その齟齬をいかに考えるかも重要な問題となろう。さらに、お互いに認識や情報・知見を披瀝しあい鍛え合う関係が必要である。こうした場や関係が、今宮高等学校と大脇会員にはある。それを見習いつつ、わたしも「挑戦」し続けていきたいと思う。